

氏名（本籍地）	増田 隼人（埼玉県）		
学位の種類	博士（文学）		
報告・学位記番号	甲第 475 号（甲（文）第 56 号）		
学位記授与の日付	2020 年 9 月 25 日		
学位記授与の要件	本学学位規程第 3 条第 1 項該当		
学位論文題目	フッサール現象学における習慣性概念の研究		
論文審査委員	主査	教授	博士（学術） 河本 英夫
	副査	教授	博士（文学） 稲垣 諭
	副査	教授	博士（文学） 三重野 清顕
	副査	准教授	博士（文学） 松浦 和也

学位論文審査結果報告書〔甲〕

【論文審査】

本論文は、現象学者フッサールの「習慣性」の概念に焦点を当て、それがどの程度の内実と可能性を含むかを検討した論文である。習慣性は、一般的に特別な理由もないままに何度も同じことを繰り返しているような場面で、半ば自明化された反復性をもつ経験だと特徴づけられる。同じことを機械的に繰り返すような場面では、明確に習慣的行為が見いだされる。

他方、現象学が扱うテーマには、感覚知覚対象の出現にかかわるものがある。たとえば波状の起伏のある物に2, 3か所の触れる経験を行えば、その起伏はどの程度の間隔でどの程度の幅で続くものかは、おのずとわかり事象として捉えられる。この場合反復的な経験が続くだろうという習性のようなものが働いている。またそれが働かなければ、持続的な事象の成立は困難になる。事象の持続的な成立とその同一性の輪郭の成立のためには、すでに習性や習慣性が内的に関与している。

そのため習慣性そのものを論じようとすれば、逆に、事象分析にすでに習慣性が前提されてしまう。一方では事象の成立には、すでに習慣の関与がある。それを分析しようとすれば習慣性そのものがすでに前提される。その意味で、習慣性を概念として捉えようとすると、それじたい「限界概念」にならざるを得ない。そのことは習慣そのものが総体として明るみに出るようなテーマにはならないことを意味する。それによって習慣性についての議論は、習慣の特質をうまく切り取るにはどのようにすればよいかという課題となる。

また習慣性は、記憶や自動的、慣性的な反復のような、類似しているが異なったテーマとも連動する。そのため多面性をもつかたちで分析を行うよりないテーマでもある。ことに記憶との関連で言えば、自動的に進行する経験の働きにかかわる以上、非宣言記憶すなわち遂行的記憶と密接に連動することは予想される。習慣というテーマそのものがこうした性格をもつ以上、本論文では、フッサールの現象学の形成場面で、「習慣概念」がどのように扱われてきたのかが主題的に論じられ、そのことをつうじて現象学に固有の習慣性の局面を取り出す作業が実行されている。

そこでフッサールの初期の静態的現象学から後期の発生的現象学への移行のなかに含まれる「習慣性」そのものの関与の仕方をフッサールの著作から丁寧に取り出して、フッサールの現象学の展開のなかに、習慣性の内実が、どのように変化してきたのかが明るみに出されていく。それが本論文の第一の論点である。

その議論の展開はおよそ以下のようなものである。第一章で行われた考察では、自我の出現が習慣性の成立と相即的であることの解明である。フッサールは、分析の途上で、「コギト」(思うこと)の主観としての純粹自我を導入する。次第にフッサールはそこから狭義の概念を拡張し、「庭」や「地平」と呼ばれる可能性の圏域を持ち、継起する体験の流れを生き

抜く自我として捉えられるようになる。そしてその結果、その流れの中にあっても持続している同じものがあること、すなわち自己の「習性」が捉えられるにいたる。それは次々に継起する体験流の中を生きる自我が、自己を「同一の自我」、ある持続的統一として生きる自我として眼差させるに至る「自己同一性」の源であり、ここで純粹自我は、固有の個性を持った自我として、個体化(モナド化)されることになる。

自我の形成と習慣性の成立は、ある意味、同じ事象の両面という性格をもち、論理的に言えば両者は「相互前提」であり、経験の作動で言えば、カップリングの関係になる。そのため習慣性の分析は、さらに前に進む場合には、繰り返し何度も習慣性が少しずつニュアンスを変えながら出現してくる入子型の分析とならざるをえないことが明るみに出てくる。

次に第二章において、習慣性がそれとして形成されてくるために必要な本質規則として、受動的志向性についての考察が行われる。これが発生的現象学と呼ばれるものである。自我が関与する以前の経験の流れのなかで、習慣性そのものの形成が明らかにされる。発生的現象学の場面では、習慣性の分析は過去把持や連合といった受動的志向性の能作の分析と一体となって進行せねばならないことが論じられる。

まず、自我の反省以前の次元、自我の作用そのものを構成する先構成の次元の存在が「原意識」の解明と共に開示され、諸体験の持続統一を形成する受動的な能作として過去把持の諸特性が注目をされる。とりわけ、習慣性の形成との関連においては、過去把持の交差志向性——与えられた体験の過去への沈み込みを表わす沈殿化の記述との相関性が強調され、それこそがまさに過ぎ去った諸体験の統一と留まりを作り、習慣性を形成するための第一の能作として捉えられる。そしてさらにまた、連合——とりわけ受動的綜合としての原連合が、先構成の次元において、諸体験をそれぞれの統一として取り纏める規則として考えられ、これが過去把持と同様、習慣性の形成において不可欠に必要な能作であることが指摘されている。

この連合は、類型の形成と類縁的であり、私達の知覚世界がこの類型的世界として捉えられていること、そして、それが二次的受動性としての習慣性の働きとして捉えられることが示される。類型化は私達の知覚認識を先意識的に基づけるが、それは遡ればさらに、触発や衝動といった動機づけの原現象によって基づけられる。そして、これらの動機づけが未来予持的な予期の志向として自我の活動を根底において方向づけ、自我の可能性の範囲を規定していることが指摘される。ここにおいて習慣性は、いわば第一章で論じたところの「庭」や「地平」と2次的に類似した機能を持つと言える。

ここで実行されている議論は、習慣の可能性の仕組みを発生的現象学の建付けのなかに読み込むことであり、習慣性がそれとして出現してくることを意識の作動上の仕組みから「連動的に」明るみに出すことである。発生的現象学の仕組みは、習慣化と相互前提の関係にあり、連動しながらプロセスを進む仕組みとして構想されている。フッサールが実行したことは、ある意味で感覚知覚の出現の規則性と習慣化の働きとを、広義の「相互基づけ」として「形成のかたち」で示したことである。相互基づけは、論理的には相互前提であるが、

生成関係での相互連動性は、カップリングとなる。

次に本論文の第二の論点として、従来の現象学以外の「習慣論」との対比で、フットサールの習慣論の特徴を明らかにしていく作業が行われている。これが本論文の第三章で実行されていることである。

典型的にはフットサルとの対比として、ギルバート・ライルの習慣概念の考察が行われる。そこでは、習慣を人間の諸活動における機械的な自動性という、語の意味の狭義の範囲に確定させようとする議論を検討し、そうした試みの困難さが明らかにされている。「慣れる」ことは、行為を習得する上では不可欠なことであり、行為の自動性に見られるように行為のコスト削減をとまなう。自動的に実行できることのなかに、行為の形成を見ることは、コスト削減による余力を引き出すことであるように見える。それは経験の形成を外的に眺めたさいの指標でもある。

だが習慣化には、能力そのものの形成も含まれるのだから、その端緒を課題として掴んでおくことは重要である。むしろ現象学的な探究そのものに内在的な習慣化の積極的な活用を考えておくべきであることになる。たとえば現象学的な探求は、注意の焦点化をつねに活用する。焦点化された注意によって事象を精確に分析していく。だがこの分析を行い、しばらく経てば、分析したことのその先がさらに「見えてくる」という探求の本性を備えている。これは一面現象学的な探求が終わらない理由であり、また探究そのものが一つの運動となる理由にもなっている。現象学的な探求は、つねにそうした局面を通過していく。注意の焦点化による探求のさなかで、習慣化をつうじて事象の一般化が起きることで、さらに「隙間が開かれて」事象のその先が見えてくるというのが実情である。そのことは焦点化された注意の振れ幅を回復させ、注意そのものの働きに弾力をもたせることにも、習慣化が関与していることを意味する。

このことを敷衍すれば、身体的な運動能力の形成場面でも、類似した在り方を見出すことができる。たとえば逆上がりができ、その次に蹴上がりができ、さらに大車輪ができるようになるさいに、それぞれの動作の修得の局面で、個々の動作が習慣化され、動作そのものに隙間が生まれ、自在にそれぞれの動作が実行できるようになる場面で、次の動作形成に進むことができるようにプロセスは進行する。習慣化という事態を、こうして運動能力の形成の場面でも見出すことができる。

そうすると、習慣化による経験の形成には、(1) 事象や事柄そのものの形成がプロセスとしてもたらされ、そのことは自我の自発性のような根本的な事象にまで及んでいること、(2) 経験の動きに対して、習慣化をつうじておのずと「隙間」が開かれ、経験の別様な可能性へとさらに開かれていくこと、(3) そうした事態を捉えるためには、経験の形成が、認識される事象の開示とともに、同時に並行して経験そのものの可能性を広げていくような作動的な並行性が成立していることが、明らかにされている。

【審査結果】

以上のような考察をつうじて、現象学から見た「習慣化」そのものの積極的な意義が、本論文によって明らかにされている。こうした点からみて、複雑で入り組んだテーマであるにもかかわらず論点も明確であり、フッサールの現象学の読みもしっかりしており、文学研究科の博士論文審査基準に照らしても、妥当な研究内容であると認められる。本審査会は、増田隼人氏の博士(文学)学位請求論文について、所定の試験結果と上述の論文審査にもとづき、全員一致をもって本学博士学位を授与するに相応しいと判断する。